

令和3年度 創造都市政策セミナー in 神戸市（オンライン配信）

日時：令和3(2021)年10月1日（金）

14:00-16:00

開催方法：オンライン開催（ZOOM ウェビナー）

主催：神戸市

共催：文化庁

創造都市ネットワーク日本（CCNJ）

テーマ：「ポストコロナ社会における文化芸術の役割」

参加者数：78名

<第1部>

1 開会

司会 ただ今より、令和3年度CCNJ創造都市政策セミナー「ポストコロナ社会における文化芸術の役割」を開催します。本日はお忙しいところご参加いただき、誠にありがとうございます。本日の司会進行を務める橋本沙抽里です。どうぞよろしく願いいたします。

本セミナーは、全国の創造都市を推進する自治体が、共通の課題について検討するものです。今回は、「ポストコロナ社会における文化芸術の役割」をテーマに、神戸市の創造性の発信拠点にあるデザイン・クリエイティブセンター神戸、通称KIITOよりオンライン配信を行っております。

本日は100名ほどの方にお申し込みいただきました。ありがとうございます。早速、セミナーへと移ります。最初に、開催都市の神戸市より、副市長の小原一徳が挨拶をさせていただきます。小原副市長、よろしく願いいたします。

○開催地挨拶

神戸市副市長 小原一徳氏

神戸市副市長の小原です。本日は、令和3

年度創造都市政策セミナーにご参加いただき、誠にありがとうございます。ここ、デザイン・クリエイティブセンター神戸、KIITOに、登壇者の方も集まってくれています。本セミナーは、文化庁と国内外の創造都市間の連携交流を促進するためのプラットフォーム、創造都市ネットワーク日本の支援の下で開催されるものです。

初めに、神戸市における創造都市への取り組みについて紹介します。1995年の阪神淡路大震災から10年ほどが経過した2007年頃から、創造都市を創造的復興として掲げ、2008年にユネスコのデザイン分野での創造都市の認定を受けました。また、創造都市ネットワーク日本には、2013年の設立当初から加盟しています。

私たちが考えるデザイン都市とは、色、物、形が美しい都市というだけではなく、市民が創造性にあふれ、神戸の新たな魅力をつくり出す都市だと考えており、BE KOBE、神戸は人の中にあるというシビック・プライド・メッセージを掲げて取り組みを進めてきました。しかし、このたびの新型コロナウイルス感染症の影響により、他都市の皆さまがたと同様、神戸市で行っていた創造都市活動、文化芸術への取り組みは大きな打撃を受けています。今後、市民にコロナウイルス感染症予防のワクチンが行き渡り、ウィズコロナ社会、ポストコロナ社会をにらんで神戸市がこれからも魅力的で持続可能な都市として発展していくためには、市民が日常的に文化芸術に触れることができ、日々の暮らしの中で創造性を発揮できる環境を自治体として提供していくことが重要であると考えています。

今回のメインテーマは、「ポストコロナ社会における文化芸術の役割」です。本日のパネリストとして、兵庫県豊岡市で活躍されている平田オリザ先生、神戸市民文化振興財団の服部理事長、モデレーターとして同志社大学の河島先生をお迎えし、ポストコ

コロナ社会において文化芸術がどのような役割を果たしていくかについて、ディスカッションをいただく予定です。神戸のみならず、全国の創造都市の皆さまがたにとって、今後の政策を検討するにあたり、大変、貴重なお話をお伺いできると期待しています。

また、ディスカッションの後には、デザイン都市神戸の推進拠点である、ここ、デザイン・クリエイティブセンター神戸、KIITOに先日オープンした子どもの創造的学びと社会貢献活動の拠点、KIITO:300の取り組みについても紹介したいと思っています。最後になりましたが、本日のセミナーが、ご参加いただいた皆さまがたにとって有意義なものとなるように期待し、開会のあいさつとします。本日はどうぞよろしくお願い致します。

司会 小原副市長、ありがとうございます。続いて文化庁より、地域文化創生本部の安井順一郎事務局長が挨拶をさせていただきます。職務の都合上、オンラインにて参加します。安井事務局長、よろしくお願い致します。

○文化庁挨拶

地域文化創生本部事務局長

安井順一郎 氏

文化庁の地域文化創生本部事務局長の安井です。創造都市政策セミナーの開催にあたり、一言ご挨拶申し上げます。本日は創造都市政策セミナーに、全国各地から非常に多くの方々のご参加をいただき、誠にありがとうございます。このセミナーの開催に際して多大なご尽力をいただいています、開催地である神戸市の皆さま、また本日、登壇いただく平田学長、服部理事長、河島先生、CCNJの佐々木顧問、関係者の方々には、深く感謝いたします。

この創造都市政策セミナーは、毎回、各自自治体において文化芸術創造都市の政策を担

っている方々を対象とし、先進的な取り組みを実施している自治体や、文化芸術振興の関係者の方々から話題提供をいただき、各地域の文化芸術創造都市の取り組みを一層、充実させるきっかけとして開催いただいています。

本日のテーマの設定として、先ほど副市長からもお話しいただきましたが、まず平田学長から、「文化芸術が社会に与える影響」という題目で基調講演をいただくと聞いています。文化庁としても、文化芸術基本法に基づき、文化政策の機能強化を進めているところです。文化それ自体の本質的な価値を追求することももちろんですが、文化の活動は本当に様々な政策分野と関わった、社会的、経済的価値を有している非常に幅広い広がりを持つ活動だと考えています。いろいろな政策分野との関わりを深めていく中で、政策の強化を図っていきたくと考えています。平田学長はこれまで長年、日本の演劇界をけん引してこられました。また、本年度からは、日本で初めての、芸術文化をテーマとした専門職大学を創設、学長という立場で、新たに人材育成や地域貢献にも取り組んでいただいていると聞いています。そうしたお話を聞きながら、皆さまと一緒に新しい文化政策の在り方を考えるきっかけとしていきたくと考えています。

続いてディスカッションとして、「ポストコロナ社会における文化芸術の役割」というテーマを設定しています。こちらについては、昨年からの新型コロナウイルス感染症の影響により、文化芸術活動の実施が非常に難しい状況が続いている中で、われわれ文化関係者に対して正面から投げ掛けられた課題だと考えています。感染の拡大防止という観点でいろいろな活動が制約されざるを得ない部分ではありますが、文化芸術の活動はわれわれ人間が生きていく上で欠かせないものであるという、文化の本質的な価値もあらためて考えるきっかけになっ

た時期でもあります。私ども文化庁でこの冬に行った全国の世論調査においても、文化芸術活動の減少に相まって、多くの方々が生活の中での楽しみや幸せが減っていると答えたという調査結果があります。文化庁としても、何とか文化芸術活動の継続を支援できるように様々な取り組みを続けています。まだ不十分なところもあろうかと思いますが、しっかりとした支援をしていきたいと考えています。

本日このテーマのディスカッションで、ユネスコの創造都市ネットワークにデザイン分野で加入している神戸市を代表し、服部理事長のお話、また、文化審議会において日々ご指導いただいている河島教授のお話を聞いていただくとともに、私どももお聞きできることを楽しみにしています。本日のこのセミナーをきっかけにし、文化芸術創造都市に取り組む各地域の皆さまの、ネットワークの拡大にもつなげていただきたいと思います。このCCNJを最大限に有効活用いただき、それぞれの都市の文化芸術活動の発展に寄与していただければと願っています。本日のセミナーが皆さまがたにとって実り多いものになるよう祈念し、私どもからのあいさつとします。どうもありがとうございます。

司会 安井事務局長、ありがとうございます。本日のプログラムは、基調講演、ディスカッション、KIITO:300の紹介の順で進めます。

ここで、オンラインセミナー中の注意事項をお伝えします。本セミナーはウェビナー形式で行い、オンラインセミナー中の皆さまのマイク、カメラはオフ設定となっています。登壇者への質問は、画面下部にあるQ&Aへご記入ください。全てのプログラム終了後に質疑応答の時間を用意していますので、時間の許す限り回答します。また、セミナー内容の録画、録音は控えていただきま

すようお願いいたします。

2 基調講演

司会 それでは早速、基調講演に移ります。基調講演では、劇作家・芸術文化観光専門職大学学長の平田オリザ様より、「文化芸術が社会に与える影響」をテーマにお話しいただきます。平田様は1962年、東京生まれで、劇作家、演出家、青年団主催として数々の賞を受賞されています。2021年4月からは、兵庫県豊岡市に開設された芸術文化観光専門職大学の学長も務めていらっしゃいます。平田様、よろしく願いいたします。

○基調講演「文化芸術が社会に与える影響」
劇作家・芸術文化観光専門職大学学長

平田 オリザ 氏

平田です。よろしくお願いいたします。本日は少し時間が短いため自己紹介は省き、早速、本題に入ります。

私自身も大学ではアーティストの立場で、アートマネジメント、社会における芸術の役割を教えています。三つくらいに分けて考えるとよいのではないかと、学生たちには伝えていきます。一つは芸術そのものの役割です。私たちの作る作品が人々の心を慰めたり、励ましたり、勇気づけたりする役割です。これが最も大事ですが、それ以外に、お祭りなどによるコミュニティーの形成・維持の役割や、最近よく言われることは社会包摂の役割です。

そして、先ほど局長からのお話にもあったように、昨今はもう少し具体的に、社会に役に立つもの、これは定量評価がしやすいのでクローズアップされてきたのでしょう。それが教育や観光、経済、あるいは医療、福祉などです。例えば、認知症の予防に演劇やダンスは非常に有効だとして注目を集めています。本日は、特に教育と観光について話をします。

私は小中学校の国語教科の手伝いをして

きたため、現在も年間 30 校から 40 校の小学校、中学校に行き、このように授業をしています。後でも触れますが、豊岡市内の 36 全ての小中学校で演劇教育を導入しています。この導入が広がっている理由はいろいろありますが、実は一番の要因は大学入試改革です。大学入試改革について簡単におさらいをすると、今までのセンター試験を廃止して、共通テストでは極めて基本的な学力を問うようにします。そして、いわゆる昔で言うところの 2 次試験、各大学の試験では、思考力、判断力、表現力、さらには主体性、多様性、協働性を問うような試験をします。これは潜在的学習能力といいますが、大学に入ってから学ぶ力を測定する試験を実施するよう、文部科学省は求めています。

実際はどうかというと、AO 入試では今までの面接、小論文ではなく、多くの大学がグループディスカッションやグループワークを導入しています。例えばお茶の水女子大学は、文系の AO 入試を図書館で行ったり、理系の AO 入試を実験室で行ったりします。問題が出されてそれに答えるため、あるいはディスカッションをするための資料を、何十万冊という蔵書の中から選ぶことができるか、まさに学ぶ力を測るような試験になっています。

そうすると、今度は高校側の受験指導、進路指導が非常に難しくなります。要するに短期的な受験勉強では対応できない、最近の言葉で言うと、地頭を問うような入試になっています。こうした能力のことを、社会学の世界では身体的文化資本と呼んでいます。身体的文化資本はご承知のように、ピエール・ブルデューという社会学者が提唱した概念で、コミュニケーション能力やセンスのことです。最近では、ジェンダーなどの偏見がないということも身体的文化資本の一つだと考えられています。

こうした身体的文化資本は、20 歳くらい

までに形成されるといわれています。味覚などは 12 歳くらいで形成されるといわれています。そしてもう一つ、身体的文化資本は、本物や良いものに触れることでしか育たないと考えられます。それはもっともな話で、例えば味覚を植え付けるのに、おいしいものと、まずいもの、安全なものと危険なもの両方を食べさせて、こちらがおいしいでしょうと教える親はいません。安全なもの、おいしいものを食べさせ続けることにより、危険なもの、まずいものを吐き出す能力を培います。あるいは骨董品の目利きです。何とか鑑定団のような人を育てるには、本物にだけ触れさせる必要があります。そうすると、偽物を見抜く能力が身に付くからです。

身体的文化資本なので、体に落とし込んでいかなければなりません。しかし、私たちがやっている演劇やダンス、ミュージカルやオペラ、要するにパフォーマンスアートは、東京のほうが圧倒的に有利です。神戸ならまだしも、私が住んでいる豊岡、但馬の子どもたち、今は豊岡が逆転して演劇が非常に盛んになっていますが、自然状態の東京と但馬だったら、アクセス数は数十倍違います。

例えば、東京都の世田谷区は「日本語」の教育特区の認定を受けているので、週に 1 回、国語以外の言語活動があり、独自の教科書を持っています。そして世田谷には、オリンピックの芸術監督をする予定だった野村萬斎さんが芸術監督を務めている、日本一の興行ホール、世田谷パブリックシアターがあります。そこに依頼をすると、区の予算でプロのアーティスト、俳優や狂言師や大道芸人などが学校に派遣されます。そのような施策を持った都市がたくさん出てきています。

もっと分かりやすい例で言うと、現在、演劇やダンスが本格的に学べる高校が全国に 80 校程度ありますが、このうちの 6 割が東

京と神奈川に集中しています。東京、神奈川、大阪、兵庫で8割です。兵庫県で言えば宝塚北高校です。例えば隣の岡山県は、非常に豊かな県だとは思いますが、1校もありません。要するに、地方はコースさえも開設できません。文化の地域間格差はこんなに広がっています。

もう一つの格差は、ご承知のように経済格差の問題です。経済格差が教育格差に直結していることは当たり前のマイナスの常識になっていますが、文化格差はもっと深刻です。教育の格差は、学校に来てくれさえすれば発見されます。この子は頭が良いのに、家が貧乏で大学に行けなくてかわいそうだと皆が思いますし、本当に優秀なら奨学金などで支援できます。しかし、文化の格差は発見すらされません。親が美術館やコンサートに行く習慣がなければ、子どもだけで行くということは起こりません。しかし、連れて行く家庭は、神戸はもちろんのこと、但馬でも親が意識層ならば、例えばクラシックが好きだと、夏休みや冬休みに京都や大阪や神戸に連れていきます。美術館が好きなら美術館に連れていきますし、少なくとも科学館には連れていきます。しかし、行かない家庭はずっと行きません。行きたくても行けない家庭もあります。一人親世帯や、土日でも忙しくて子どもをなかなか連れていけないなど、家庭ごとにスパイラル状に身体的文化資本の格差が出てしまいます。

日本は明治以降150年かけて、教育の地域間格差のない素晴らしい国をつくってきました。しかし現在は、文化の地域間格差と経済格差の2方向に引っ張られて、子どもたち一人一人の身体的文化資本の格差が広がっています。しかもこれが、大学入試や就職に直結する時代になってきました。

皆さまの中にも、地方の出身で、大学で神戸や京都、大阪、あるいは東京に出た人もいるでしょう。私たちがしているような小劇

場演劇や、昔で言うアングラ演劇、それからジャズやコンテンポラリーダンスやコンテンポラリーアートなど、それらは大体、大学に出てから触れば良かったものです。東京はすごいと思っていても良かったのです。しかし、これが大学入試段階で問われてしまうと、田舎の子は逆転のチャンスがありません。君はセンスがないから東京に来られない、という話になります。

ちょうど2年前に、萩生田文部科学大臣が身の丈発言をして大きな問題になりました。これは英語の外部試験の話での発言でしたが、これが国会で問題になったとき、野党も問題の本質が全く分かっていませんでした。この大学入試改革自体は、理念としては間違っていない。それまでのような、知識偏重の一元的な試験では、日本の大学に多様性が確保できないので、これはせざるを得ません。しかし、多様性を確保しようとすると必ず、この身体的文化資本が問われるような試験になります。そのため格差が広がりやすいのです。

教育とは、必ずこのような根源的な矛盾をはらみます。皆、個性尊重の教育がよいと言いますが、個性尊重の教育だけをしようとすると、必ず格差が生まれます。なぜなら、その個性は家庭で育つものだからです。当たり前です。もし格差を生みたくないなら、ゆとりのない完全な管理教育のほうがよいです。教育とはその根源的な矛盾の中で、ベターなものを選択していくしかありません。

そうすると、今回の大学入試改革の本質は間違っていない。ただし、問題はそのまま進めると、身体的文化資本の格差が反映されやすくなるということです。だとしたら、ソリューションは一つです。要するに地方ほど、地域ほど、教育政策と文化政策を連動させて、子どもたち一人一人の身体的文化資本が育つような教育に変えていかなければなりません。これが実は、大学入

試改革と連動した文化政策の在り方ではないかと私は考えています。

せっかくなので、コミュニケーション教育がなぜ演劇なのかということについて話をします。これはお茶の水女子大学の浜野隆先生の学力テストの追跡調査です。SESは家庭環境のことです。当然、SESの高い子ほど学力テストの成績が、残念ながら高くなります。ただし、ばらつきがあることが分かります。要するに、困難な家庭で育った子の中にも、一定数の学力の高い子がいます。この子たちを追跡調査しました。そして分かってきたことが、最近よく言われる非認知スキルです。

非認知スキルは大きな概念で、要するに学力テストやIQなど、数字に表せるもの以外は全て非認知スキルといいます。その中でも、特に困難な家庭に育ちながら成績の高い子たちは、このような能力があります。例えば、「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある」、「難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦している」。特に重要なのが、「学級会などの話し合いの活動で、自分とは異なる意見や少数意見の良さを生かしたり、折り合いをつけたりして話し合い、意見をまとめている」、「学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがある」です。非認知スキルとは、最初のうちは一般の方が、しつけは大事というような形で注目されたのですが、集中力を育てるためには、正座をさせて30分ドリルをすることなどはあまり効果がなく、実は皆で何かをした時に達成感があり、しかも拍手を浴びる、そのような経験が非常に重要だということが分かりました。まさにこの演劇的手法を使ったコミュニケーション教育は、ここを狙ってきました。

このような数字もあります。これも浜野先生と同じ統計ですが、小学校6年生の学力テスト上位25パーセントのA層と、下位25パーセントのD層を比較したものです。

もちろん1番は、「家には本がたくさんある」です。国語で24.6ポイント、算数でも14.9ポイントの差がついています。また、「子どもが小さい頃、絵本の読み聞かせをした」が17.9ポイントです。しかし、「博物館や美術館に連れていく」が次で、15.9ポイントです。これは、「毎日、子どもに朝食を食べさせている」の10.4ポイントよりも、断然、上です。子どもの成績を上げたかったら、朝ご飯を食べさせるより美術館に連れていきなさい、という話です。同じような統計で、アメリカではミュージカルに連れていくというものもあります。

ショッキングなものはこれです。「ほとんど毎日、子どもに勉強しなさいと言う」がマイナス5.7ポイント、算数ではマイナス7.3ポイントです。これは全く逆効果です。子どもたちは、知的好奇心を刺激してあげれば勝手に学ぶということです。この学ぶ意欲が大事であり、学ぶ意欲をもたらしものが、アートであったり、科学館であったり、そのような場所です。本も子どもの本ではありません。親の蔵書です。要するに、知的環境を子どもたちの周りに用意しておくことが大事です。しかし、繰り返し言いますが、これを自然状態で放っておくと、格差がますます広がってしまいます。そのため、地方ほど公教育でこれに取り組んでいかなければなりません。

では、この子たちはどのような力を持っているのでしょうか。最近、学校では、学び合いという言葉をよく使います。実際にスキルとしても、「これから10分間は学び合いタイムです。今やったことを教え合ってください。」というようなことをやっています。要するに子どもは、先生の言っていることはあまり聞いておらず、それよりも友達の発言や失敗や成功から学ぶことが非常に多いということです。

これは非常に有名な統計です。先生が言ったことは5パーセントくらいしか聞いて

いません。プリントにすると 10 パーセント、実験学習などをするとますます上がっていきます。最も良いのは、他人に教えた経験です。要するにこの子たちは、隣の子の面倒を見ている子です。隣の子にちょっかいを出して教えている子です。昔は地域社会などで、原っぱにガキ大将などがいるようなところでも、こうした非認知スキルは育ってきましたが、現在はそれが学校だけになってしまいました。公教育の中でも、役割分担、リーダーシップの交換を意図的にしていかなければならない時代になっています。こうしたところでも、演劇手法を使ったコミュニケーション教育が注目されています。学力とは学ぶ力です。学んだ結果ではありません。今までは、大学入試でも学んだ結果を測ってきましたが、これからは大学入試でさえも、学ぶ力を測る試験になっています。この学ぶ力を育てるには、アートが非常に大きな役割を果たしています。

そうなると、文部科学省がずっと言ってきた、この学力の 3 要素の内容が異なってくるのではないのでしょうか。今までは知識や技能を基盤にし、その上で思考力、判断力、表現力を身に付けて、さらに高等教育で主体性、多様性、協働性を身に付けるようになってきました。しかし、こちらが基盤なのではないかということです。要するに、こちらをきちんと身に付けてあげれば、子どもたちは勝手に学ぶということです。

皆さんは反転授業という言葉聞いたことがあると思います。家ではインターネットなどできちんと予習をして、学校ではアクティブラーニングをします。これは何が反転したのでしょうか。要するに、学校の権威、教育の権威や権力が反転したのです。これまでは、教員が知識や情報を持っていたので、子どもたちは学校に来なければそれを得ることができませんでした。生きるための知識や技能を身に付けるためには、学校に来ざるを得ませんでした。しかし、イン

ターネットの時代では、世界中どこにいてもその知識や情報は得られます。しかもそれが、今回のコロナ禍でばれてしまいました。多くの子どもたちは、こんなことなら学校に行かなくてもよいのではないかと思ったでしょう。しかし、そうではありません。学校でしか得られないことがあります。それはこちらです。

主体性や多様性や協働性は学校でしか学べません。このコロナ禍で、子どもたちの教育の権利は非常に奪われました。しかし、それを奇貨として何かに活かすとすれば、この点にあると思います。学校本来の力は、知識や技能を身に付けるのではなく、主体性や協働性、多様性を学ぶことによって、学ぶ力を育てることです。そのためにはアート、広い意味での芸術教育が、これから非常に大きな役割を果たすのではないのでしょうか。

豊岡市では、先ほど述べたように市内 36 校の全ての小中学校で、演劇手法を使ったコミュニケーション教育を導入しています。これは大学入試改革に、きちんと公教育で初等教育から対応しているということで、地方創生の予算を使っています。U ターン I ターン政策の一環です。現在は、但馬地域の全ての高校でもこうした教育を導入しています。本学の教員たちが交代で教えに行っています。

少しだけ豊岡の話をしてします。兵庫県の私のいる地域を但馬と呼びます。東京都と同じ面積を持っていますが、人口 16 万人です。豊岡は東京 23 区と同じ面積で、人口 8 万人です。ちなみにこの建物は、先ほどから紹介している KIITO といいます。神戸税関の隣にある巨大な建物です。これは KIITO を誘致するための建物でした。なぜ兵庫県がこれほど広いのかと但馬の高校生に聞くと、但馬は貧乏だったため神戸とくっついたら、大概答えますが、そうではありません。神戸港を国際的な港湾都市にするためには巨額な費用が必要でした。そこで当時の明治政

府は、生野の銀山と但馬の養蚕、つまりカイコ、これが最大の輸出品目だったので、この但馬地域を兵庫県に組み入れることによって神戸港をつくっていきました。そのため、神戸と但馬地域は歴史的にも非常に密接な関係がありました。

3市2町で構成されています。豊岡市自体も、2市5町が合併した大きな市です。コウノトリの再生で有名になりました。それから城崎温泉です。コロナ前はインバウンドも5年で40倍になりました。城崎に城崎国際アートセンターという世界有数のレジデンス施設を造りました。現在も年間、二十数カ国から100件近い申し込みがあり、その中から15団体を選んで作品を作っています。短期的な成果は問いませんが、必ずアウトリーチ活動をしていただいています。例えば数年前には、森山未来さんが1カ月ほど滞在して、城崎の子どもたちと作品を作りました。これは別に特別なことではなく、ほぼ毎月こうしたことが行われています。この施設のモットーは、「この町で、世界と出会う」です。要するに、神戸、大阪、京都に出でいなくても、この町で世界的なアーティストに、普通に日常的に出会えるということです。

さらに、今年の4月に芸術文化観光専門職大学が開設しました。1学年80人、定員320人の小さな大学ですが、四年制大学の誘致が地域悲願だったので、これが実現しました。国は、日本で初めて演劇とダンスを本格的に学べる公立大学としました。これも本日お聞きになった方はご存じかと思いますが、非常に恥ずかしい話です。東京藝術大学には音楽学部と美術学部があるだけで、演劇学部はありません。国立大学に演劇学部が一つもないなどという先進国は他にありません。やっと兵庫県立の公立大学の中に、演劇を本格的に学ぶ大学ができました。

なぜ観光と芸術なのかとよく聞かれますが、アジアの各国は、観光政策と文化政策を

一元的に行っています。日本だけが、文化庁は文部科学省、観光庁は国土交通省とばらばらの政策になっていますが、これを一体化していかなければなりません。これは少し考えると分かると思いますが、コロナ禍以前、特に関西はインバウンドで大変潤ってきました。もちろん観光業界の大変な努力もありましたが、最大の外的要因は円安と東アジアの経済発展です。中国、東南アジアに、10億人近い中間層が一挙に出現しました。年間所得が300万、400万になると、皆、海外旅行に行くようになります。そのときに、中国、東南アジアの方が初めての海外旅行先として、近くて安くて安心安全な日本を選んでくれました。

しかし、これからです。もう一度、来ていただかなければなりません。しかし、富士山に何度も登りたいという人はあまりいません。そうすると、食やスポーツなども含めたコンテンツが重要になってきます。これを文化観光といいます。その文化観光の中でも特に日本が弱いものが、夜のアミューズメントです。例えばブロードウェイのように、家族で安心して楽しめるミュージカルのようなものが少ないです。夜の時間帯が非常に退屈だということが、アンケート調査にも出てきています。

例えば、ウィーン国立歌劇場は、毎日、違うオペラを上演します。なぜ毎日、違うオペラをするかということ、オペラはご承知のように、ソリストを休ませなければならぬため、毎日、同じ演目ができません。ただし、それで劇場が休んでしまうと、アメリカや中国や日本から来た音楽好きの観光客は、ローマやパリに行ってしまう。せっかくヨーロッパに来ているのですから。しかし、ウィーンで毎日、違うオペラを上演すれば、重いスーツケースを置いて、昼間はザルツブルクに行ってモーツァルトハウスを見たり、チロルの森まで足を延ばして「サウンド・オブ・ミュージック」の舞台を見たり、

あるいは美術館を見るなどして、夜はウィーンに戻ってきてオペラを見ます。富裕層なので、当然、良いホテルに泊まって、1日に最低でも5万円くらいは落とすでしょう。ウィーン国立歌劇場は2000人収容できるので、直接収益だけで1億円です。年間250ステージすれば250億円です。そこに、ホテルやレストランの雇用が生まれ、消費が生まれます。

現在、ヨーロッパはLCCの時代といわれています。ローコストキャリアです。ヨーロッパ圏内のどこに行くにも100ユーロ程度で行けて、時間も1時間以内です。そうすると現実的に、午前中にパリでエッフェル塔に登り、夜はウィーンでオペラを見ることが普通にできるようになってしまいました。そこでヨーロッパの多くの都市は、どうすれば泊まってもらえるかを競うようになってきました。今、述べたように、夜の文化的な催し、ナイトカルチャー、ナイトアミューズメントがなければ泊まってもらえません。昔は男性しか旅行をしなかったのが、観光地のそばに歓楽街をつくっておけば良かったのです。しかし、現在は家族で旅行をし、財布は妻が握っています。従って家族で楽しめる、子どもと一緒にいける、できればハイカルチャー、ハイスペックのものが重要です。

例えば現在、関西ではカジノの誘致が問題になっていますが、シンガポールの人によく言われました。シンガポール政府はカジノを最後に造りました。シンガポールはかつて日本人がショッピングを楽しむまちでしたが、シンガポールドルが上がっていく過程でショッピングの魅力がなくなっていくます。そこでシンガポール政府は、観光政策を大きく転換します。周りには、これから富を持つであろう華僑にどんどん来てもらうまちにしようと考えました。例えばシンガポールオーケストラは、東南アジア最高峰の技術を持っています。そこに良い

プロデューサーがいてプログラムを変えていけば、ジャカルタやバンコクやクアラルンプールのお金持ちのクラシックファンは何度でも来ます。マーライオンを何度も見たいという人はあまりいません。しかし文化観光は、コンテンツを差し替えればピーターが何度でも来てくれます。これが文化観光の強みです。

本学は、文化観光の中でも舞台芸術に特化したものを学び、そしてこうしたものを企画し、運営し、実践できるような人材をつくっていくことが狙いです。芸術文化観光専門職大学とは、芸術と文化と観光を学ぶ大学ではなく、芸術文化観光という、日本にとってどうしても必要な、最も重要な学問をこれから確立し、その人材を育成しようとして私たちは考えました。これは豊岡の観光課題とも直結しています。要するに、豊岡、但馬が国際的なリゾートになっていき、海外からの富裕層の長期滞在を狙うためには、昼のスポーツと夜のアートが必須条件です。そのための人材を育成します。

ここまで話せばご理解いただけたと思いますが、実は神戸も全く同じ課題を抱えていると考えています。神戸市の生きる道は、ナイトカルチャー、ナイトアミューズメントの育成でしかないと思っています。これだけ世界遺産に囲まれていて、夜景がきれいで、そして神戸ビーフという圧倒的なキラコンテツを持っている都市です。昼間は京都に行こうが大阪に行こうが高野山に行こうが、広島に行こうが姫路城に行こうが、夜は神戸に戻ってきて連泊していただき、時にはスポーツを楽しんでいただく、夜はアートを楽しんでいただきます。

昼のツーリズムと夜の滞在では、消費額が7倍から10倍違うと言われていています。皆さまもヨーロッパへ旅行に行くときに、昼は忙しいのでサンドイッチなどで済ませ、夜にお金をかけるでしょう。従って、京都や大阪で昼間、散々観光しても、お金は神戸に

落とさせます。但馬も国際リゾートとして、そのように発展していきたいです。150年前、但馬が港湾都市、神戸を支えたように、神戸市と但馬、豊岡が連携し、兵庫を文化観光立県にしていくことが、私たち芸術文化観光専門職大学の狙いです。これからもぜひ連携していければと思っています。駆け足でしたが終わります。

司会 平田様、ありがとうございました。平田様が行ってこられた演劇の活動が、子どもたちのコミュニケーション能力の向上や、地域社会の活性化にとって非常に重要であることがよく分かりました。

3 ディスカッション

司会 続いてディスカッションの登壇者を紹介します。ディスカッションでは、神戸市民文化振興財団理事長の服部幸司様と、「ポストコロナ社会における文化芸術の役割」をテーマにお話しいただきます。モデレーターは、同志社大学経済学部教授で文化経済を専門にされている河島伸子様です。よろしく願いいたします。

○ディスカッション「ポストコロナ社会における文化芸術の役割」

劇作家・芸術文化観光専門職大学学長

平田 オリザ 氏

(公財) 神戸市民文化振興財団 理事長

服部 孝司 氏

<モデレーター>同志社大学経済学部教授

河島 伸子 氏

河島 ご紹介ありがとうございました。早速、ディスカッションに移ります。平田さんの圧倒的で大変説得力のある具体的なお話をいただいた後で、さらにそれを服部さんと共に深めていくことが、このセッションの狙いです。最初にこのディスカッションのテーマ、「ポストコロナ社会における文化

芸術の役割」をいただき、ポストコロナ社会というのは少し早いのではないかと思います。そう感じる方もおられると思いますが、主催者の皆さまの意図としては、ワクチンが行き渡り、ある程度、自由に活動できるような時代をポストコロナと呼びたいという話でした。まさに本日がそれに当たるのでしょうか。できればこれがずっと続いてほしいですが、緊急事態宣言が解除され、完全に昔のようにはないまでも、ある程度は自由に活動できる社会のことを指しているとのこと。

今、平田さんの講演の感想を少し述べましたが、服部さんにもぜひその辺りをお聞きしたいです。そして、文化振興財団での取り組みについてご説明いただきたいと思えます。よろしく願います。

服部 神戸市民文化振興財団の服部です。先ほどの基調講演で平田さんがおっしゃった、身体的文化資本を身に付けるというか、育てる機会や場を提供することがわれわれの役目だと思います。ポストコロナ社会が早く来てほしいです。まず、昨年の年度半ばの頃、財団は7億円の赤字に陥ってしまいました。基本財産が2億円しかないのに、民間企業ではとうに倒産しています。われわれも路頭に迷うような状況にありました。コロナ禍のダメージが非常に大きく、アーティストたちを支援しなければならないという役割を担いながらも、自分たちそのものが存続を脅かされる事態でした。

このような財団法人は、法律で正味財産が300万円を切る状態が2年続くと自動的に解散することになっています。これには全国の財団法人が皆、非常に苦しみ、おびえました。そうした制度上の問題も、コロナ禍で浮き彫りになりました。われわれは幸いなことに、神戸市との協議で資本注入され、また、かなり自助努力も行い、何とか乗り切って今年に入っています。コロナ禍のダメ

ージは、文化芸術、それを支えるわれわれにとっても大きく、非常につらい時期です。

私たちは神戸市内の文化振興の役割を担っていて、15施設を運営しています。基幹的な施設が神戸文化ホールという2000人余りの大ホールと900人の中ホールを備えたホールで、それ以外に9区にある各区の文化センター、それから、演劇や美術の先端的なアートを創造したり発表したりする神戸アートビレッジセンター、愛称KAVCという所を運営しています。このように、非常に上下の幅が大きく、全国でも第一線の芸術団体であるプロの室内管弦楽団やプロの混声合唱団を運営し、知名度を上げるための広報活動をする一方で、文化センターなどを中心に、一般の方々に身近で文化に触れていただく事業も行っています。

コロナ禍を経験し、職員たちの総意として、非常につらい目に遭いました。このような目には遭いたくはなかったのですが、逆にコロナ禍であったからこそ知らされたというか、痛感した面もありました。例えば、オリンピックの1年延期で露呈してきた女性蔑視の問題や人種差別の問題など、日本は本当に先進国なのかと疑わざるを得ないような事象がいろいろと表面化しました。そのことを考えても、コロナ禍以前に戻ってはなりません。われわれはそれを踏み越えて、新たなステージに上らなければなりません。

昨年はベートーベンの生誕250年ということで、「ベートーヴェン・チクルス」という連続演奏会をしました。各演奏会には主にヨーロッパの指揮者やソリストを招く予定でしたが、結果的にはそれができないため、日本在住の指揮者やソリストにどんどん置き換えていきました。それがかえって、われわれには欧米至上主義のようなものがありました。日本の音楽家も十分に実力を兼ね備えていることを再認識させました。もっと身近なことと言うと、例えば、舞台を

つくっている舞台課の職員たちとアーティストの上下関係のようなものが、少し民主化されてきました。それと、舞台関係者の中で昔からずっとある縦主義のような上下関係も、こうした中でフラットになってきました。そのような気付きがいろいろありました。

その中でわれわれとしては、まさに身体的文化資本のようなものを提供できる団体に、さらになっただけでいかなければなりません。ビフォーコロナではなくポストコロナというステージとして、一歩、二歩、高い所に上っていくことがわれわれの使命だと思っています。

河島 どうもありがとうございました。今、コロナ禍の現状において、どのようなことをされてきたかということにも触れていただきました。あらためてお二人に、コロナ禍での文化芸術活動に関してどのような制限や現状があり、そして、コロナ禍での文化芸術の役割について、改めて伺いたいと思います。平田さんからお願いいたします。

平田 良いことは一つもありませんでした。もちろん、その中でいろいろ希望を見つけていかなければなりません。音楽を含めたライブエンターテインメント産業はこの20年で急速に伸び、1兆円産業といわれています。一説によると、その7割から8割が溶けて流れてしまったとのこと。特に私たちは在庫を持たない商売なので、すぐには回復しません。飲食業でも、緊急事態宣言が解除されたからといって、皆、1週間に7回も8回も外食するようにはならないと思うので、回復には時間がかかるだろうとよく言われます。多くの方たちが職を失ったり、他の職に転職していったりしました。

何より、公演中止などになった場合、上演されるはずだったその作品が、世界の演劇

史に残る作品になった可能性があるわけですが。私たちにはどこにチャンスがあるか分かりません。私がヨーロッパでデビューしたのは、1998年のフランスワールドカップの関連事業で、私の「東京ノート」という作品が上演され、100人しか見ていなかったのですが、そこに有力プロデューサーがいたことがフランスデビューのきっかけになりました。どこにチャンスがあるか分からないので、そのチャンスを失わせてしまったことは、最も悔いの残ることです。

私だけではなく、野田秀樹さんや宮本亜門さんや西田敏行さんなどいろいろな人間が窮状を訴えてきましたが、テレビなどで窮状を訴えるたびにインターネットでたたかれました。勝手なことを言うな、命のほうが大事だろう、今まで好き勝手なことやってきたのだろう、というようなことを言われます。命は大事ですが、命の次に大切なものは一人一人、違うと思います。要するに皆さまの中にも、音楽で人生を救われた人もいれば、映画で勇気もらった人もいます。絵を見ると心が落ち着くという人もいれば、週に1回はカラオケに行きたい人、スポーツ観戦に行きたい人など、様々な人がいます。命の次に大切なものは一人一人違うので、それを理解することを、最近ではエンパシーといいます。シンパシーはかわいそうな人をかわいそうだと思う自然に出てくる感情ですが、エンパシーとは、異なる価値観、異なる文化的な背景を持った人が、なぜそのようなことをするのかということを理解する能力のことを指します。

要するに、演劇などは不要不急だと言うことは簡単ですが、自分は演劇を見ないけれども、君にとって演劇は命の次に大切だということは分かる、という気持ちがエンパシーです。このエンパシーを育てるのに、芸術は非常に大きな役割を果たします。ヨーロッパで演劇教育が盛んな理由は、多文化共生型の社会になっていくときに、他者

を演じてみることで、異なる価値観、異なる文化的な背景を持った人の行動や言動の理由が理解できるようになるからです。その訓練を初等教育から始めます。このエンパシーは非常に大事であり、そのためにはアートが必要なのですが、エンパシーのない方にはアートが届きにくいというジレンマがあります。これは時間をかけて、本日述べたように公教育で少しずつアートを増やしていき、傷を少しずつ癒やしていくしかないのではないかと今は思っています。

河島 ありがとうございます。服部さんはいかがですか。先ほど少し触れていただきましたが、その他にもいろいろ工夫して活動されていたのではないのでしょうか。

服部 平田さんがおっしゃったように、命が大切で、文化芸術は不要不急なもので、お飾りのように乗っているものという認識は、私ははっきり間違いだと思っています。人によってはもう一つのパンです。われわれはそれを提供する立場であり、抽象的表現ですが簡単にはやめません。

その一つとして、神戸は4年に1回、国際フルートコンクールを開催しており、今年がその開催年に当たります。今回は他のコンクールが中止になったこともあり、前回の倍以上である400人以上の応募者が全世界からエントリーしてきました。その中から五十数人の予選通過者を選びました。本来であればこの神戸に集まってきて、8月末から9月の初めにかけて、文化ホールで1次審査、2次審査、最終審査まで行い、優勝者を決めます。しかし2週間待機などいろいろなことがあり結果的にそれができないため、悩みに悩んで、代替措置として予選で選ばれた五十数人をさらに1次審査で二十数人にまで絞るという、本来なら神戸で行うコンクールを、審査員のそれぞれの国で審査してもらいました。審査員も6カ国

から9人の方に来てもらっていたのですが、彼らも訪日できないためです。そうして26人が選ばれました。望むらくは、この人たちが来年の3月末に神戸に来て、2次審査以降を文化ホールで行い、最終的に1位、2位、3位を決めたいです。それが、現在われわれの進めていることです。そのためにいろいろ盛り上げもしています。

一方で、平田さんもいろいろしていらっしゃいますが、われわれとしても特に子どもたちには、例えば6年かけて神戸市内の全小学校に、先ほど話した室内管弦楽団や混声合唱団、もしくは地元の音楽家たちにお願いをしてアウトリーチを行っています。これも緊急事態宣言が出ると中止や延期になるのですが、何とせよ6年間で全うしたいと思っています。

また、文化ホールに小学4年生全員を集めて、インリーチの活動も行っています。なかなか全校が来てくれる状況にはありませんが取り組んでいます。このように、現在は何とせよでも粘って、しない方向に行かないように歯を食いしばっています。

河島 ありがとうございます。次の話題は、次世代の育成についてです。冒頭で述べたように、ポストコロナ社会を生きる次世代の育成について、まずは服部さんに、それから平田さんにも伺いたいと思っています。私たちくらいの年齢になると、この1年半は長い人生において我慢の1年半として受け止めることもできますが、若い人にとっては非常に大きいです。現在、自分の身近なところで言うと大学生ですが、大学に入ってからずっとオンライン授業で、ようやくこの頃は週に1回、出掛けるようになっただけという人も結構いて、胸が痛みました。さらに若い小学生になると、8歳の子を想定した場合、そのうち1年半がコロナ禍だった、そのような人生は今後、大きな心のしこりになるのではないかという心配もありま

す。

神戸市は次世代の育成について、特に力を入れていると聞いています。後ほど、このKIITO:300の新しいスペースにおける次世代育成の活動について詳しく説明があると思いますが、その他のところで服部さんにお聞きしてもよろしいでしょうか。

服部 次世代を育てることは非常に大事なことです。これはコロナ禍の時期においても歩みを止めるべきではないと思っています。皆さまは、例えばパフォーミングアーツ、舞台を使った芸術については、そこで音楽を奏でたり演劇をしたりする人とホール、というようにしか映らないかもしれません。しかし実は、その演劇や音楽を作り上げて支えるために、それ以外の様々なスタッフがいます。その人たちのレベルアップや宣伝の企画をつくるためには、マネジメントが非常に重要です。先ほど平田さんが話されたように、音楽大学や美術大学や芸術大学はいくつかありますが、マネジメントをする、作り上げていく人材を育成する教育機関は極めて少ないのです。

そのような人材が、この芸術文化観光専門職大学から卒業していきます。卒業した後は、その人たちが活躍する場がなければなりません。それは恐らくわれわれの役割です。まさに学問として身に付けた人たちに、オン・ザ・ジョブ・トレーニングで実際に仕事をして身に付けてもらい、さらにレベルアップしてもらうためには、その人たちを引き受けていかなければなりません。そのために、平田さんの大学とわれわれが提携し、恐らく来年度以降に学生たちを引き受けて、インターンシップ的にわれわれの所で働いてもらい、身に付けてもらうという取り組みも行います。

もう一つ大事なことがあります。せっかくそのような能力を持った人が入ってきて、新人ばかりでは機能しません。その人た

ちを指導して、さらに高いレベルに引き上げていくリーダー的な人たちが必要です。私たちも、そのような役割を担える人として音楽や演劇などの人たちを引っ張ってきて、プロパーの位置に置いています。当財団もかつては神戸市の出向職員がほとんどでしたが、現在はそれをプロパーに置き換えており、その人たちがこの財団を牽引し、神戸の文化を向上させていく中心部隊になってほしいと考えています。そのようなソフトが、ハードに勝るくらい必要で大事なことでであると認識しています。

河島 ありがとうございます。アートマネジメントという職業の大切さということでしょう。在学生の研修も引き受けるのですか。

服部 はい。平田さんの大学はまだ始まったばかりで、卒業生は数年後まで出てこないで、取りあえずは在校生を引き受けて学んでもらいます。

河島 ありがとうございます。平田さんも、そのような方々を育てる専門職大学だと思いますが、もう少しその辺りを具体的にお聞かせください。

平田 先ほども紹介したように、このような公立大学ができたのは日本で初めてです。私自身は幸いにも世界中の大学で教える機会をいただき、様々な大学を実地に肌で感じてきたので、周回遅れの利点を活かして、世界的にも例のない大学がくれたのではないかと思います。要するにアートマネジメントと、俳優やダンスの実技、それから照明や音響のスタッフワークを、全ての1年生が学びます。その中で徐々に専攻を決めていきます。

観光やビジネス、マネジメントの授業も多くあるので、起業ができるようになりま

す。日本のアートマネジメントで弱い点は集客です。公的なお金を使っている、きちんと集客は意識しなければなりません。そうしたところを4年間で鍛えます。さらに、おっしゃっていただいたように専門職大学なので、600時間以上のインターンシップが課されているため、通常のインターンシップ以上に、3年次、4年次になると1カ月単位で預かっていただき、鍛えていただきます。このような人材が毎年80人ずつ出てくれば、恐らく日本の舞台技術の世界に大きなインパクトを与えるでしょう。

学生も本当に日本中から集まってくれました。この少子化の時代に大学をつくって大丈夫かと多くの方から言われましたが、ふたを開ければ平均の倍率が7.8倍で、1年目の大学としては異例の高倍率でした。北海道から沖縄まで、全国から来ています。例えば根室から来た女子学生は、オーストラリアでの1年間の留学体験があります。私たちの世代だったら、当然、国際的に活躍する人間になりたいというようなことを志願書に書くでしょう。しかし、彼女はオーストラリアの地方都市に1年間いたのですが、オーストラリアでは商店街もまだ生き生きしているし、5時になったら皆、仕事をやめて、夜は音楽を楽しんだり演劇を楽しんだり、家族でバーベキューをしたりして生活も楽しんでいるのに対し、地元はなぜこれほど寂しくなってしまったのだろうかと考えていろいろ調べ、豊岡で4年間、アートと観光を学び、根室に戻って根室のまちづくりに貢献したいと言います。そのような学生がほとんどです。まちづくりや地域振興の意識を持ったアートマネジャーが育成できるということが、本学の一番の強みではないかと思っています。

河島 このセッションは短く、もう残り数分しかありません。最後に、平田さんに再び、神戸市との連携について伺います。先ほ

ど、学生のインターンシップの話の話を伺いましたが、文化観光政策という本日お話しただいたことについて、神戸のポテンシャルや伸びしろとして期待できるものは何でしょうか。また、専門職大学と神戸市との連携について、学生だけでなくもっと広がりがあるのではないかと思うので、その辺りの環境についてお話しいただけますか。

平田 基調講演の最後にも話したように、神戸はこれだけの観光資源に囲まれた街です。神戸単独ではなく、連携がポイントになってきます。淡路島から但馬まで非常に豊かな自然があり、それから、兵庫の場合は何と言っても、海外を引き付ける食です。この食を含めた文化観光はこれから非常に重要になってきます。ぜひ豊岡市、但馬地域と神戸が、人材育成についても連携し、そうしたことも最初から意識した人材を育てていければと思っています。

河島 どうもありがとうございました。短い時間でしたが、非常に内容の濃いディスカッションができたと思います。簡単にまとめると、新型コロナウイルス感染症の拡大で人々が分断されがちな時代にあっても、文化芸術は非常に大事なもので、平田さんがキーワードとして挙げていたエンパシーという、それぞれの違いを認めていき、そのことに対して共感していく社会をつくるためにも、文化芸術が非常に重要であるということです。

それから、神戸市はこの創造都市ネットワークの中でも先輩格で、先進事例として皆さまが目指してこられた、一つのモデル都市だと思います。本日お話を伺い、最先端の芸術、それから一般の人たちに身近な参画的な活動まで非常に幅広くカバーされていること、そして、但馬地域との連携も含めて、ますます発展していきそうだという印象を大変強く受けました。

この後また、第3部で詳しく KIITO:300 の活動や神戸市の文化戦略についても伺いたいと思います。ディスカッションはこれで終わります。どうもありがとうございました。

司会 平田様、服部様、河島様、ありがとうございました。文化芸術の力で人々の相互理解が進んでいくということが分かりました。ポストコロナ社会における神戸での文化活動に、一層期待が持てます。平田様、服部様には、後ほど皆さまからの質問に答えていただきます。ここで10分間の休憩とします。15時20分より再開しますので、よろしく願いいたします。

<第2部>

4. KIITO、KIITO:300 の紹介

司会 政策セミナーを再開します。デザイン・クリエイティブセンター神戸、通称 KIITO の永田宏和センター長より KIITO の紹介、そして、先日9月18日に KIITO の3階にオープンした、子どもの創造的学びと社会貢献活動の拠点、KIITO:300 の紹介をしていただきます。永田センター長、お願いいたします。

○KIITO:300 の紹介「元気が集まる。元気が広まる。創造の中心地 KIITO:300」

KIITO センター長 永田 宏和 氏

皆さま、こんにちは。KIITO のセンター長をしている永田宏和です。今ご紹介いただいたように、社会課題解決型のデザインセンターとして展開しているこの KIITO と、先月オープンした KIITO:300 について、スライドを使って紹介します。

本日は皆さまにはオンラインで視聴していただいているので、まず建物について、どのような施設かを簡単に紹介します。一言で言うと非常に古く伝統的で、そして広い

です。1万4000平方メートルという大きな面積を有しています。下のほうにあるように、レンタルのスペースが数々あります。見ると分かるように、1階には大きなホール、2階にはギャラリーやライブラリーのような少し公共的なスペースもありながら、3階と4階にはスタジオと呼ばれている、クリエイターたちの事務所が入るテナントスペースもあります。3階には会議室もあります。

写真をご覧ください。これがKIITOホールです。見えている所だけで1000平方メートルあります。そしてKIITOカフェ、ライブラリー、これは2階です。3階に行くと非常に重厚感のある会議室があります。本日、今はこの場所にいます。この辺りはレンタルスペースです。そして、先ほど言ったクリエイター関係のスタジオ、オフィスが集積しています。40近くスタジオが集積しているので、その人たちとのコラボレーションも数々展開しています。

少し歴史を振り返ります。先ほど平田オリザさんの話にもありましたが、ここはKIITOと呼ばれているゆえんでもある生糸検査場です。西日本を中心に生産されていた生糸がここに集められ、品質検査、等級分けをして神戸港から輸出されていました。これが先ほどのKIITOホールで、ここも検査のスペースになっていました。今は生糸検査場の歴史を伝えるギャラリーというか、小さなミュージアムのようなものも2階に併設しています。

神戸市は2008年にユネスコの創造都市ネットワークの中のデザイン都市として認定されました。現在は、デザイン部門だけでも世界で40のデザイン都市があり、そのうちの一つが神戸です。デザイン都市・神戸の拠点として、この生糸検査場だった建物が、2012年8月にKIITOとしてオープンしました。

KIITOの事業は、自分たちで企画をして行っている自主事業と、先ほどのスペースを

レンタルする事業という二つの軸で展開しています。2012年の開設当時に掲げたキャッチコピーがあり、これはここがやろうとしていることを非常によく表しています。

「みんながクリエイティブになる。そんな時代の中心になる」。コピーライターの岡本欣也さんをお願いをして作ってもらったコピーです。つまり、神戸市民が全員クリエイティブになるために私たちは活動するということです。もっと言えば、神戸市民が全員クリエイティブになれば、もうKIITOは要らないかもしれないというくらいの気持ちで始めました。言い換えると、子どもから高齢者までが皆クリエイティブになるということなので、あらゆる世代を対象とした創造教育拠点として2012年に誕生しました。

様々な活動を展開していますが、KIITOの活動に横たわっているフィロソフィーがあります。活動理念です。市民が全員クリエイティブになるということなので、神戸市民や神戸の地域を支援していく施設ということですが、この、風、水、土、種という考え方はどの形でも使えるというか、地域でも大学生でもいろいろなところで使える考え方なので、少し紹介します。

まず、土の人です。風、水、土のうち、土は動かない存在なので、地域住民のことで。神戸であれば神戸市民のことを土の人と呼んでいます。恐らく、昔の土の状態はコミュニティが豊かで、お祭りがあり、餅つきをして、本当に皆、仲良く暮らしていたはずでした。そのような状態だと、土が肥沃です。水分も養分も含んでいるので、地域の活動のことを種と呼んでいるのですが、どのような種を植えても自生できました。誰の手を借りなくてもお祭りは皆でつくるものだったし、餅つきも皆が参加するもので、豊かでした。

ところが現在の土の状態は、元気な所もちろんありますが、往々にして、非常にコミュニティが希薄になっていて、崩壊し

ているといわれている地域まであります。そうなるくと土が枯れているので、今までの種、つまり活動を植えても育たず、根が張りません。そうすると、種を品種改良して、乾いた土にも効くような強い種をつくらなければなりません。ところが、地域の方が種をつくり替えることはなかなかできません。しがらみもあり、なかなかそのような場所に立てません。その中で KIITO は風の人という存在で、種を品種改良して強い種につくり替え、風に乗せて地域に届けに行きます。

KIITO は種をつくり続けなければならないので、その種に水をあげて育ててくれる人も必要です。それが地域の市役所の方、区役所の方、社会福祉協議会の方、まちづくり団体の方、最近では大学も頑張ってくれたり、NPO が頑張ったり、実は水の方は結構います。しかし、種をつくり替える風の人がいまません。強い種がないという状況です。

私たちは種をつくってきたので、良い種、強い種とはどのような種なのかということが分かってきました。条件は二つです。まず、不完全プランニングです。つまり完成しきっていない、持っていったときに地域の人たちと一緒に作り替えることができる、関わりしろがあるように、不完全にできていたほうがよいというポイントです。

もう一つは、とはいえ興味関心を持っていただかなければならないので、クリエイティブの力で種そのものに魅力があふれていて、皆が興味を持って関わろうとしたときにつくり替えられるようにつくっていけるかどうか、非常に重要だと分かってきました。KIITO のコンセプトとして、「+クリエイティブ」というものを開館当時に掲げました。これは、社会課題+クリエイティブということです。社会課題もたくさんあります。まちづくり、教育、観光、防災など、ここに書いてあるこの左の文字は、実は開館以来、神戸の様々な部局の方から相談を

いただき、各部局で抱える課題を社会課題として、市民を集めてゼミを開講するとうように、課題に対して打ち返しをしてきた、その歴史です。

KIITO では、様々な種をつくってきました。本日はその種を一つ一つ詳しく紹介できませんが、種の種類として、先ほどのゼミでつくる種と、自分たちで企画をしてスタッフとクリエイターと一緒につくってきた種があります。この中に KIITO を非常によく表している、象徴的なプログラムが二つあるので見てください。一つ目が、「ちびっこうべ」という、子どもの創造教育プログラムです。二つ目が男性高齢者向けの、もう一度、技を磨いていただき地域で活躍してもらおうという、通称、パンじいといわれている、「男・本気のパン教室」というプログラムです。

「ちびっこうべ」では様々なワークショップを展開していますが、シェフ、建築家、デザイナーなど、全てプロが子どもたちに教えています。そしてワークショップスタイルで、子どもたちが飲食店をつくっています。15軒の飲食店が集まってまちを形成していくのですが、もちろん飲食店だけではまちにならないので、ラジオ局ができたならラジオ関西が手伝いをしてくれたり、新聞社ができれば神戸新聞社が手伝ってくれたり、そのようにして、どんどん、まちを活性化させていくプロジェクトです。このお店づくり、まちづくりのプロセスにおいて、神戸の子どもたちは様々なクリエイティブの専門家から指導を受けながら、一緒に創造教育をしています。これは海外から視察に来られるような、世界的に有名なプロジェクトとして成長しています。

もう一つが、「男・本気のパン教室」です。料理教室もあります。これは、神戸を代表するパン屋のシェフたちが先生役になり、男性高齢者にパンの技術を教えています。男性高齢者の居場所問題は非常に大きな問題

で、リタイアした後、家にいてテレビばかり見て、おばあさんがノイローゼになるというような社会課題があります。そうした中で、仕事ではなく、自慢ができる技を磨きます。パンや、他の料理の技も現在たくさんつくっています。このように、シェフが先生役になってパンの製造技術を学び、このおじいさんたちは、実は5期生までいるのですが、地域で非常に活躍しています。神戸で生まれたプログラムが、現在は大分や広島や大阪でも行われています。

実は介護予防にも効果があるということが分かってきました。今までは体操などしかありませんでしたが、現在はこのように、国も注目するような、高齢者向けの新しいプログラムを展開しています。他にも、ゼミと書いていますが、先ほどの神戸市の各部局から課題をいただいてゼミを開講し、様々な社会課題解決のアクションを事業化しています。

そして今年から、新しいキャッチコピーを掲げました。「これまでも、これからも。クリエイティブがつくるのは、元気だ。」これから神戸の町をもっとアウトリーチして元気にしていこうということで、それに併せて内装改修も1階と3階で行いました。本日は皆さまに来ていただけませんが、これが1階エントランス部分です。これが30メートルのロングカウンターで、図書館が2階にこれから移転してくるので、自習スペースとしても使っていただけます。

KIITOに残っていた家具を家具職人にリメイクしていただき、随所で使っています。KIITO ショップもこれに併せてオープンしています。KIITO と関係のあるクリエイターにオリジナルグッズを作っていただき、販売を開始しています。

そして、これが KIITO:300 です。創造的学びと文化活動のスペースとして、2階は先ほど言ったように、三宮図書館が来年の7月頃に移転してきます。3階には社会貢献活

動のプラットフォームと、子どもの創造的学びの拠点が生まれました。

子どもの創造的学びの拠点と、社会貢献活動プラットフォームの二つの機能がオープンするということで、ブランディングを行いました。まず、コピーライターの岡本欣也さんと、日本を代表するクリエイターである、アートディレクターの寄藤文平さんをお願いをして、岡本欣也さんにスペースの名前を考えていただき、KIITO:300 と名付けました。会議室が301 から始まっているので、300 と名付けました。これだと普通なのですが、さすがコピーライターだと感じるところは、「元気が集まる。元気が広まる。」の丸。丸です。この KIITO:300 のロゴマークも作っていただき、子どもの創造的学びのプラットフォームはキャンプと名付けました。これはステートメントですが、ホームページに書いているので、一度、読んでみてください。ここで何をしようとしているかというメッセージが書いてあります。そして、社会貢献活動の支援のクリエイティブなプラットフォームは、ファームと名付けました。これもステートメントに書いているので、読んでみてください。

本日は皆さまをお招きできませんでしたが、900 平方メートルのスペースに、このように、子どもの創造教育をするキッチンも作りました。ここで、パンじいたちが子どもにパンの製造技術を教えるようなプログラムを、これから展開していきます。そしてこれは、工作など物を作るスペースです。

真ん中がセミナールームで、ワークショップができます。奥に行くとミーティングルームがあり、大学との連携もこれからやっていくので、大学のプロジェクトチームが占有してしばらく使えるようにもしています。

キャンプではどのようなことをしていくかということ、先ほどの風、水、土で言うと、子どもたちにも将来は風の人になってほし

いです。リサーチをして企画をし、強い種をつくれる人を育てるための創造教育をしていきますが、これにはゴールがあります。この KIITO:300 はこれから土日にオープンして、クリエイティブな学童保育のようなことをしていきます。そのときに来る子どもたちが楽しむことも大事ですが、ここで様々な種、プログラムをつくり、それを最終的に公教育や地域のイベントや家庭への動画配信などにつなげたいです。つまり、ここが拠点になって種をつくり、もっとアウトリーチしていく、その種づくりのための生産方法というイメージを持っています。

土日に開けるのですが、本日、来ていただいた皆さまは分かるように、結構不便です。駅から離れているので、相当、吸引力のあるものを持ってこなければ、土日に開けても親御さんに来てもらえないのではないかと考えました。そこで、ちびっこうべが大変な人気なので、ちびっこうべをやっていないときも、3カ月に1回、ちびっこうべカフェやちびっこうべショップを皆でオープンするという短めのゴールを設定し、小さな山をつくります。それまでの間は、毎週土日に来てカフェのメニューを考えたり、エプロンを作ったり、様々なプログラムを展開しながら、皆でいろいろなものを作っています。現在の予定では、ちびっこうべお化け屋敷を作るというプログラムがもう始まりそうです。その様々なカフェやショップ、お化け屋敷もそうですが、それらを作っていくところに、ちびっこうべでお世話になっている様々なアーティスト、建築家、デザイナー、シェフが協力してくれます。月替わりで来ていただくことになると思います。

他にも、神戸市の教育委員会との連携が始まっていて、小学校の総合学習のプログラムを作り始めています。これは、建築と子どもの総合的学びを組み合わせた、「ユメイエ。」というプログラムです。子どもたちが夢の家の模型を作るというプログラムを、

現在、この KIITO の入居者である畑さんという建築家と一緒につくっていて、来年の1月頃には北区の道場小学校でモデル授業を展開する予定です。

また、現在、創造教育で注目されているボードゲームがいつ来ても体験できるように、45種類のボードゲームを入れました。そして、企業との連携もどんどん進めようということで、これも既に始まっています。実はもう終わりましたが、アシックスから相談を受けて、速く走れる靴を開発するというので、靴のデザイナーになってもらい、リサーチから企画、デザインまでしてもらいました。本当に工場に発注し、写真に写っているような靴を作りました。速く走れるための靴なので、最初に測定をしておいて、最後に走ってもらったのですが、皆、見事に速くなりました。そのようなプログラムも展開しています。最後に、商品発表会のようなプレゼンテーションもしてもらいました。

他にも、VIVITA という所と組んでプログラミング教育を始めようとしていたり、キャンプ専属のボランティア、サポーターを集めて、キャンパーという名前で創造教育の人材育成をしていこうと考えたりしています。

そして、ファームです。現在、地域活動、社会活動の担い手が完全に不足しているので、ファームでは大学生や社会人の新しい担い手づくりと、現在、活動している地域団体、NPO 法人の支援をしていこうとしています。未熟ですが、実際には単独の学生個人を扱うというよりも、大学機関と連携しています。現在は各大学が社会課題解決型の人材育成機関をつくっているの、そうした所と KIITO が課題を設定し、ゼミのようなものを始めていきます。社会人では、シニア層にターゲットを絞ったり、神戸市の職員の副業マッチングのようなこともしていきたいと考えたりしています。他には、地域団体の方々向けの研修プログラムも展開予定

です。

これも既に始まっていて、神戸大学の V. School、大阪大学の SSI の超域イノベーションなどと組み、2023 年に開催予定のフラワーロードを舞台に SDGs をテーマにした地域共創イベントを企画しています。そのイベントの企画を現在、大学生たちに考えてもらっています。もうこれは終わりましたが、KIITO のゼミでも同じテーマでイベントのアイデアを考えてもらいました。10 月 16 日に神戸大学、大阪大学の学生も集まり、KIITO のゼミ生、その中には神戸の他の大学生も入っているので、様々な人たちが集まってそれぞれが考えたアイデアを交換し、その中から選んで、2023 年に開催予定となっています。

他にも、明日、1day ワークショップとして私も講師を務めます。この社会課題解決手法を伝えて、実際に例題として、KIITO:300 で多世代交流のプログラムを考えてもらうというプログラムを設定しています。明日、そのワークショップを、大学生を中心にした 20 名の学生たちと一緒に、4 時間から 5 時間かけて実施予定です。

これが最後のスライドです。既に相談対応の窓口も開いていて、地域団体、NPO 団体、神戸市の区役所でまちづくりをしている方々、企業からの相談もどんどん来ています。それらの困っている方々に、種のつくり方や事例を紹介し始めています。以上です。ありがとうございました。

司会 永田センター長、ありがとうございました。KIITO:300 ではこれからいろいろなプログラムが実施されていくとのことなので、神戸にお越しの際はぜひ皆さま、お越しください。

5. 質疑応答

司会 次に質疑応答に移ります。Q&A にお寄せいただいた質問に答えていきます。平田

様、服部様、永田様へ質問がある方は、今からでも大丈夫なのでご記入ください。質問をいただくまでの間、登壇者より本日の感想を一言いただきます。まず平田様、本日はいかがでしたか。

平田 この KIITO の説明を聞いて、本当にうらやましいと思いました。但馬には神戸にない圧倒的な自然があり、子どもを対象にこういう試みをしています。ですから、ぜひ交流や交換など、神戸の子どもたちに但馬に来ていただき、今度は自然を使ってこのようなことをする、あるいは但馬の子どもたちをここに連れてきて遊ばせたいと強く感じました。神戸市とともに発展していけるといいと思います。本日は 2 時間半かけて但馬から来たかがありました。

司会 ありがとうございます。続いて服部様、本日の感想をお願いいたします。

服部 冒頭にも述べたように、当財団はコロナ禍で非常に大きなダメージを受けました。そうした中で、文化を守っていくというか、平田さんが言うように、身体的文化資本を身に付けてもらう機会の場を確保していくことがより大切だということを、本日のシンポジウムでも本当に実感しました。それには、本日このシンポジウムを視聴してくださった、地方自治体の文化の関係の方々、また、その関係団体の方々の責任というか、役割が非常に大きいということをあらためて強調したいと思います。なかなか民間ではこうしたことを支えていけません。自治体が文化の火を消さないことを、より強く求めます。

司会 ありがとうございます。永田様、感想をお願いいたします。

永田 本日は、前半の平田さん、服部さん、

そして河島さんの話を聞いていて、次世代育成、そして次世代育成における創造教育の大切さがひしひしと伝わってきました。先ほど平田さんがぜひ交流をと言ってくれましたが、皆で取り組んでいかなければなりません。どこかが単独ですのではなく、いろいろな所が協力し合いながら進めていくことだと感じました。

平田さんの話から、1点、神戸にアドバイスというかヒントをいただきました。ナイトカルチャーには、もちろん久元市長も力を入れています。完全に妄想ですが、一度、ナイトカルチャーを考えるゼミをしてみたいという思いもあったので、本日、私も参加させていただいて、非常に有意義な時間でした。ありがとうございました。

司会 ありがとうございました。それでは、Q&Aにいただいた質問を紹介します。こちらは平田様宛てです。「基調講演で出ていた文化資本の概念がよく分からなかったので、もう少し詳しく教えていただけないでしょうか。また、演劇と学校の関わりに関連して、学校の教育プログラム以外での展開は考えられないのでしょうか。学校で実施する意義についてもご説明いただけると幸いです」と来ています。お答えをお願いいたします。

平田 文化資本とは非常に広い概念であり、これまで教養といわれていたものが全て文化資本に当たりますが、その中でも本日紹介したものは身体的文化資本です。後天的に獲得できる、例えば資格や蔵書や書画などは全て文化資本です。その中でも、現在、非常に問題になっているものが身体的文化資本、要するに自分の努力だけでは獲得できない、家庭環境などが非常に影響するものです。この身体的文化資本は、日本では間違っただけで捉えられることがあるのですが、ピエール・ブルデューが言っているのは、これ

ほど格差がつくという、実は負の概念です。だからどうかしようという話なのです。それが後段の学校教育への質問にもつながります。

例えば、KIITOの素晴らしい活動でもジレンマがあります。小学生がここまで自分で来ることはなかなか難しく、富裕層、意識層の子どもたちしか参加できない。行政のアウトのイベントは常にそのジレンマを抱えています。そのため、ある程度は公教育で行い、興味のある子たちが自分でこうした所に来られるようになる力までは、公教育の中で付けなければなりません。

もしかすると質問は、不登校の子たちをイメージしているのかもしれませんが。それはそれでまた別の施策として必要なことがあります。公教育で取り組むということが、今は特に格差社会の中では非常に大きなことです。

司会 ありがとうございました。次の質問です。こちらにも平田様宛てにきています。日本国内外の方々が、兵庫県豊岡市を演劇のハブにしようとする平田オリザ様の姿に感銘を受けています。質問です。1、エンターテインメントと学問は親和性があるでしょうか。私の学生時代、学力低下や凶悪な少年事件を誘発する恐れがあるマンガやゲームというエンターテインメントは、教育とは相性が悪い印象でした。2、今後の学校教育のあるべき姿を含め、エンターテインメントは日本の学校を救う切り札となり得るのかを伺いたい、とのことです。お願いいたします。

平田 エンターテインメントを広く捉えようと、人を楽しませるということです。これは観光とも非常に親和性が高いです。逆に言うと、日本のこれまでの学校教育の活動は、大学あるいは研究者でさえも、他者を意識することは非常に少なかったです。例えば、

豊岡市はコミュニケーション教育を3段階に分けて、小学4年生まではあいさつができる、人の話が聞けるというコミュニケーションの基礎力を鍛えます。小学5年生から中学1年生は協働性です。一緒に何かをして楽しい、達成感があるという気持ちです。中学2～3年生になると、誰に伝えるかを意識します。

例えば、最も京都府寄りの但東町は、最も過疎の町ですが西陣を支えていて、まさに絹織物の産地です。ここは中学校の修学旅行で東京に行くのですが、有楽町のど真ん中で、但東町についてのプレゼンテーションを中学3年生が行います。どのようなプログラムにするか、1年かけて自分たちで考えます。撒くチラシなども全て自分たちで作ります。ある学年はダンスをしました。要するに、誰に何を伝えたいかの、「誰に」の部分、今までの学校教育では非常に弱く、他者性がありませんでした。私は、エンターテインメントという要素がこれから日本の学校教育に入っていくことが、日本の学校教育を豊かにすると考えています。

司会 ありがとうございます。次で最後の質問とさせていただきます。こちらは平田様と服部様宛てに来ています。「文化事業、文化活動がコロナ禍で渴望されているのは確かだと思えます。一方で、それを提供する現場が疲弊していると思えますし、提供する現場や時間帯がコロナ禍の後も従来のように確保できるか難しいことも考えられると思えます。まずは再建が必要だと思えますが、そのときに何が必要になるのでしょうか」。まずは平田様からお答えください。

平田 最も必要なものはお金です。予算を付けてもらうことです。これは国レベルの問題であり、芸術文化が国にとって本当に必要なものなのかが改めて問われると思えます。伝統芸能もそうですが、一旦切れてし

まうと再開することが非常に難しいので、照明や音響のスタッフなど最も疲弊している方々に辞められてしまうと、再開するときに担当する人がいなくなってしまうのです。そのような方たちをどう救済するかが喫緊の課題です。

司会 ありがとうございます。続いて服部様、お願いいたします。

服部 あくまでも私どもの財団の枠内での話ですが、かつて当財団は、ほとんどの職員が神戸市からの出向職員でした。いわばプロパーの職員はその下働きであり、しかも有期雇用で何年かで雇い止めでした。それではほとんどやる気になりませんし、ノウハウも蓄積されません。私は、出向職員からプロパー職員にどんどん人材をチェンジしていくというか、プロパー主体の財団にしていく方向で進めています。プロパーの職員も試験などをして、どんどん幹部職や管理職に昇進してもらい、財団の運営全体をけん引してもらうように切り替えていきたいと思っています。

プロパー職員がやる気を持ち、自分たちでいろいろなことを主体的に企画したり実行したりできるようにするために、平田さんがおっしゃるように、私の仕事はお金の獲得です。市や経済界から取ってくることは私の仕事ですが、本当に自分たちで財団を引っ張っていく、つくっていくという自覚が、ポストコロナの中でより生きてくるのではないのでしょうか。

司会 ありがとうございます。時間となりましたので、ここで質疑応答は締め切ります。皆さま、いろいろな質問をいただき、ありがとうございました。

6. 総括

司会 最後になりますが、創造都市ネット

ワーク日本の顧問であり、文化庁、文化創造アナリスト、学校法人稲置学園理事の佐々木雅幸様より、総括の言葉をいただきます。オンラインでつなぎます。佐々木様、お願いいたします。

○総括

文化庁文化創造アナリスト・学校法人稲置学園理事 佐々木 雅幸 氏

皆さん、こんにちは。佐々木です。本日は2時間にわたり、大変、素晴らしいシンポジウム、討論会が行われたと思います。ちょうど2年前に豊岡に伺い、創造農村ワークショップをCCNJとして主催しました。たまたまそのときに、平田オリザさんが住民票を豊岡市に移し、これからは兵庫県に根付いてクリエイティブな若者たちを育ててと言っていました。さらに、豊岡演劇祭を世界的なものにしたいという話を聞いたことを思い出していました。

日本全国の創造都市という運動がさらに大きく深く強くなっていくためには、どれだけ創造的な人々を生み出せるかです。特にこのコロナ禍の中で、これからの社会を担い、コロナ禍を超える、ビヨンドコロナのクリエイティブな若い人材をどのようにつくっていくかということは、非常に大事なテーマです。まさにそのテーマにチャレンジされるという話で、非常に勇気が湧いたと思います。

それから、現在117を超えている、全国の創造都市のネットワークで、ここの卒業生やそこから生まれた人たちが、まちづくりに、あるいは芸術的な事業の拡大に貢献してくれる姿も目に浮かんできています。

私も現在、金沢で、幼稚園から大学まである学校法人の理事をしています。これからの社会の担い手をどのように創造的につくれるかということが、日本の社会の再生にとって非常に大事だということで、本日の平田さんのメッセージは深く受け止めたい

と思いますし、厚く連帯をしたいです。また来月、秋田でもご一緒しますが、創造都市のネットワークは世界的にも広がっているので、ぜひ豊岡市も、神戸市と並んでユネスコ創造都市に入っていただくと、もっと厚みが出ると思いました。

本日は服部さん、河島さん、永田さん、それぞれの方に、大変、貴重なコメント、発表をいただき、誠にありがとうございました。神戸市の皆さま、私はKIITOの評価委員を10年近くしてきました。この新しいKIITO:300には図書館も加わるので、さらに発展されることを期待しています。どうもありがとうございました。

7. 閉会

司会 佐々木様、ありがとうございました。今回のセミナーは、神戸のみならず全国の創造都市にとって、今後の政策を検討するにあたり、大変貴重な話となったのではないのでしょうか。

最後に視聴者の皆さまへ、アンケートへの協力をお願いします。セミナー終了後、自動的にアンケート画面に移りますので、そちらで回答をお願いします。本日の回答が難しい場合は、後日、皆さまにメールでお送りするURLよりアンケートの回答にご協力をお願いいたします。それでは、これをもって本セミナーを終了します。お忙しいところご参加いただき、誠にありがとうございました。登壇者の皆さまもありがとうございました。